
Little Busters ! -Rin_AFTER-

(21)(21)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Little Busters! - Rin AFTER -

【Nコード】

N6600T

【作者名】

(21)(21)

【あらすじ】

リトバス短編小説です。タイトル通り、鈴√のアフターストーリーとなっています。少々シリ阿斯。

（前書き）

修学旅行の事故から1年の月日が経ち――！
…

「さて、と」

休日だけど服装には拘らず、ラフな格好を選んだ。今日行く所は特別な場所だけど、わざわざ正装に着替える様な事じゃない。僕の方は支度が出来たので、何か隣にいる鈴に声を掛ける。

「鈴、準備出来た？」

「できたぞ」

鈴も普段通りの格好なので、無理に気を遣う必要も無い。ちらりと時計に目をやると、時刻は午前10時18分。

「そろそろ行こうか？」

「そだな」

そう言つて手を繋ぎ、僕と鈴は寮を出た。ちなみに鈴が男子寮の僕の部屋に来るのは、あの一件以来黙認されている。

寮の廊下を歩き出した僕の右手には、線香の束が握られていた。

鈴は左手に握ったポ キーの箱から、器用に一本ずつ取り出しては食べていた。僕が『手を離そうか？』と尋ねると、怒りながら否定してくる。

気付けば、僕達の目には目的の場所が見えていた。

「お菓子、全部食べちゃわなきゃ駄目だよ？ 鈴」
「分かつとるわ、ボケエ」

恥ずかしそうに残りを食べる鈴を見て、僕は苦笑しながら空を見上げる。

六月中旬の暑い陽射しを放つ太陽が、一面の青空に輝いていた。

――

「……」

僕らは一つの墓石の前に立っていた。普通の墓石よりも一回り大きいそれには、僕らのかけがえの無い仲間の名前が刻まれていた。

棗 恭介

井ノ原 真人

宮沢 謙吾

神北 小毬

能美 クドリヤフカ

西園 美魚

来ヶ谷 唯湖

僕と鈴を強くしてくれた リトルバスターズの、大切なメンバーの名前。

僕は線香を添え、ゆっくりと立ち上がる。

「…」

「…」

黙祷をしている間、僕の瞼の裏には彼らの姿が映っていた。

飽きる事の無い、馬鹿をやった毎日。野球をしようと言いだした事から全てが始まり、やがて集まった10人。初めは個性が強すぎて合わない所もあったけど、気付かない内にそんなものは無くなっていった。

全員が、一つになって活動していた。

…僕と鈴を強くする事にさえ、一人一人が命を懸けて。

「…暑いな」

鈴が隣でそう呟く。だるそうな口調の理由は、その暑さだけじゃないはずだ。

鈴の目がうつすらと赤くなっているのを、僕は指摘しなかった。

「…帰ろっか？」

「…うみゅ」

僕の問いに小さく頷き、最後にもう一度墓石を見つめる。去り際に背中に視線を感じたが、振り返る事は無かった。

『…やっぱり、直枝さんらしいです』

—…。

『なよなよしていると、ますます女々しくなりますよ?』

『やはり、まだ“残る”か』

—何が?

『理樹君、お姉さんから一つ言っておく。…鈴君を泣かせるんじゃないぞ』

『もー、なーにメソメソしとるんだい!』

—そんな事無いよ。

『嘔吐いちゃ駄目だぞ? 理樹君が元気無いと、鈴ちゃんまで元気無くなっちゃうから…ネ?』

『わふー。リキが暗いのです』

——なんで、皆…。

『私は、明るくて優しいリキが大好きですから。鈴さんも、きっと
そうなのです。だから…』

『…理樹君』

——待つて。

『私は、鈴ちゃんと約束したよ？ その約束を果たすには、理樹
君の力が必要だから』

——僕は、まだ。

『迷っちゃダメ。振り向いちゃダメだよ。…心の奥に、しまってお
いてね』

『つたく。弱っちいぜ、理樹』

——強く、なったハズだ。

『確かに。けどな、なんつーか…ぎりっぎり、ほんのちよいだ。…
あーっ！ うまく表現できねえーっ！』

—— 分からないよ。

『まあ、あれだ。…心の筋肉、だな』

—— どういう、事？

『心が筋肉が足りない、心が弱い…つまりは、メンタルの事を言いたいんだろう』

『そうだよそれぞれ！ って謙吾！』

『まったく…ここで引き留めてどうする、この筋肉馬鹿』

—— 心。

『そうだ。お前はまた、あの世界の最初の頃と同じ様になるつもりがある』

—— …。

『理樹…俺はお前を信じてるぜ。強くなれるんだ、お前は』

『そう、だな。…振り切れ、理樹』

— …。

『どうした』

— …。

『…ここに、来ちまったのか』

— 僕は、鈴を守れないの？

『…今のままじゃ、な』

— どうしたらいいんだ。

『簡単さ。…切り替える、理樹。今を見る、今を聞け。世界は待つてはくれない。— 繰り返しては、くれないんだ』

—— 待つて。

—— 行かないで、恭介。

『…お前に最後のミッションを与える』

—— …。

『このミッションを、鈴と二人でやり遂げる。それで…達成した時に、二人で報告しに来い』

—— その、ミッションは？

『—— 生きてくれ』

『俺達の、分まで』

「
…」

目が覚めた。部屋はもう明るくなっている。
時計を確認すると、時刻は午前六時半。

「
…」

頬に伝うものがあつた。
冷たくて、暖かい。

「…鏡を見るの、嫌だなあ」

そんな事を呟く朝だった。

――・――・――

「鈴！」

寮を出た所で鈴を見つけたので、走って駆け寄る。

「おはよう」

「おはよう、理樹」

どこか普段とは違う感じた。でも僕は、その理由を知っていた。
何故なら僕も、鈴と一緒にだったから。

「…夢を、見たんだ」

切り出したのは鈴だった。

「不思議で、懐かしくて…暖かい夢だった」

「…奇遇だね。僕も、似た様な夢かも」

僕の反応に、鈴は心底驚いた様な表情を見せる。
しばらくの沈黙の後、鈴は静かに聞いてきた。

「…ミッションは？」

だから僕は、笑顔で答える。
もう始まっている、僕らに課せられたミッション。

「…鈴と二人で『生きる』事」

「…勝手に変えんな、ぼけえ」

やり遂げられる。

二人でも、二人じゃないから。

八人の命を合わせて。
十人で、リトルバスターズだから。

（後書き）

いかがでしたか？

小説自体は以前から書置きしていたものなのですが…

リトルバスターズ！ は数少ない涙腺崩壊ゲームで（もちろん筆者の）、今でもリフレインを見ると泣けます。きょうすけえええ（ry

感想等沢山書いていただけると嬉しいです！

今後の励みになりますので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6600t/>

Little Busters！-Rin_AFTER-

2011年10月8日22時03分発行